

巻頭言 ロールシャッハ・テスト

二つ折りにした紙を開いてインクをたらし、それを閉じて、また開く。するとそこに、左右対称な様々な図形が、インクのたらし方と操作の偶然に従って現れてくる。この、ロールシャッハ・テストの図版を次々に見せ、何に見えるかと聞きながら、被験者の反応を無表情に書きとめてゆく心理学者の姿をかつてテレビドラマか何かで見て、へえ何がわかるんだろう、という好奇心と共に、素人の想像の及ばぬところに成立する専門家の世界に、ある種の頼もしさのようなものを感じた記憶がある。

最近、思うところあって、このロールシャッハ・テストの資料を、カウンセリングの仕事をしていたこともある K さんのところに借りに行った。彼は、なぜこんなものに興味を持つのかといぶかりながらも、ロールシャッハの原図版と、いくつかの解説書を用意してくれた。以前、この同じ K さんから臨床心理関係の本を借り込んで読んでいたころ、私は心理学というのはずいぶん怪しげな学問だという印象を持った。それはひとことで言えば、批判的意味で用いられるところの「形而上学」そのものではないか。心理学の各学派は、特定の心理メカニズムを仮定し、それが事実と合っている（ように見える）ことをもってそのようなメカニズムが存在するものとみなし、それを根拠に体系を構築する。かくして生まれるフロイト派、ユング派、アドラー派などは、全くちがうことを言っているのだが、にもかかわらず、各派のセラピストが患者を治療して、症状が‘治る’というのはどういうことなのか。もしかしたら、そのような「理論」とは全く関係のないところで、‘治って’いるのではないのか…。そういう疑問を、私は持った。しかしその中で、ロールシャッハ・テストというものはかなり標準化が進んでいて、心理学の分野の中では客観性が高いように見える。このシステムの実体は何か。それが私のとりあえずの関心であった。

1920年代にロールシャッハ・テストの手法が提起されて以来、被験者の反応と、性格や精神病との関連についての情報が蓄積されてきた。初期には各検査者が、自らのデータと経験に基づき、直感的ないし、いわば名人芸的に診断していたようだが、1970年代以降、‘包括システム’が目指される。それは、これまで得られた情報を大規模にデータベース化し、それに基づいて、統計手法を駆使したより客観的な評価を行う試みである。私には、ロールシャッハ・テストの包括システムとは、多変量解析を用いた一種の extrapolation（外挿）であるように見える。テストにおいては、被験者の解答傾向を様々な指標で数値化し、データベースを参照して、これまでそうした傾向を示した人々がどのような性格や精神症状を示していたかという情報と突き合わせる。たとえばこれこれの指標でこの値の範囲を示した人々の 80%はうつ病であった。ゆえにこの場合もうつ病の可能性が高い、と、単純に言えばそういうことである。

ここには、いくつかの理論的問題があるように見える。今までの事例をもとに、この事例もこうだろうと判断するこのやり方は、メカニズムを無視した「帰納論」では

ないか。その発想は‘占星術’や‘陰陽道’にも共通する。たとえば『三国志』で、諸葛孔明が、来るべき戦いの帰趨を占う。それは今まで、星座がそのような配置を示した時、かくかくの事例が生じたという膨大な経験を背景にするものであるにしても、星の位置と人間界の事例に明瞭な因果関係を指摘できない以上、現代のわれわれにはナンセンスとしか映らない。ただロールシャッハの場合、たとえば、絵の中で二人の人物がいっしょに何かしていると見立てることが協調性の指標に寄与するなど、被験者の性向とテストにおける反応には何らかの関連があると思わせるものがある。また帰納論は、理論的にはともかく実的には、科学研究の多くの場面で利用されて、事実上肯定されているとも言える。最も気になる誤診、誤判断についても、ロールシャッハ解析では偶然の一致を評価するための誤差検定も含まれているし、マニュアルでは、たとえ 80%陽性でも残りの 20%の偽陽性の可能性を考慮して、必ずテスト以外の情報も考慮して総合的な判断を下すべきことを強調している。個々の診断者の経験をデータベース化し、膨大な情報の体系化をはかるやり方は、近年、漢方医学などでも試みられて成果を挙げていると聞く。マニュアルを読む限り、ロールシャッハ・テストの包括システムは、理論的にはほぼ完成しているように見える。

しかしその完全性は、体系内部のことにすぎない。ロールシャッハで多用される判別関数分析は、外的基準に基づく一種の推測統計である。つまり、これまでの事例に対する精神病質とか、うつ病質などの診断を信用した上で統計的操作を施し、新たな事例がそれらの症例に当てはまるかどうかを判定する。たとえばそれが、男女であるとか、職業であるとか、だれが見ても確実なものに依拠するならば問題はない。しかし精神病、まして性格などというあいまいなものを、外的基準として採用することは妥当であるのか。精神病診断に基づくロールシャッハ・テストの評価体系をもとに、逆に精神病を診断したとすれば、それはいわゆる「論点先取り」「循環論法」に他ならない。あたかもそれだけでは倒れてしまう二枚の板が、互いに支えあってかろうじて立っているようなものである。精神病の診断とはどれほど確実なものなのか。かつてと今とで変わってきている、ということはないのか。そもそも精神病とは何か、‘狂気’とは何であろうか。『狂気の歴史』を著した哲学者のフーコーは、その活動の初期、ロールシャッハ・テストを多用し熟練する経験を経て、それを捨て、いわゆる‘狂気’の社会的背景を探求する方向に進んだ。方法論の内部においていかに洗練され、確実に見えようとも、またそうであるがゆえにこそ存在する限界。ある理論的基盤に依拠して作動する時には有効であっても、視点を枠内に局限し、基盤そのものを疑い、転換する力となり得ない。科学的方法、なかんずく統計的手法とは、しばしばそのようなものであるのかもしれない。

< S >